

自己肯定感&コミュニケーション能力アップを目指した別室指導

不登校生徒の状況

中学校入学後から2年生2学期途中までは、通常どおり登校していた。2年生2学期途中から突然、教室に入ることを拒むようになった。原因は不明であり、別室指導による対応を継続している。

具体的な取組

○校内別室の活用

校内別室を校舎1階に設置し、登校しやすい環境にした。週4日は校内別室指導支援員が常駐しているため、生徒は自分のペースに合わせて登校することができている。利用状況は、校内別室指導支援員が記録した「支援ノート」により、全教職員が共有できるようになっている。

○情報共有の工夫

校内別室支援員から学年や教科の教員に、個別指導の記録や今日気が付いたことを伝えている。その上で、学年や教科の教員が別室に行ったり、別室で生徒と一緒に給食を食べながら、生徒や校内別室支援員と話をしたりしている。



○居場所の提供（学級との関わり）

学級内の仲の良い生徒と共に、トランプやジェンガやゲームなどを行うことができるよう、校内別室に他の生徒を招待し、学級の生徒との関わりを継続できるようにした。同学年の生徒との交流を通して、話し方や接し方を学ぶことができている。

- ・外から見えないよう、カーテンを付ける。
- ・生徒同士の交流が生まれるよう、いくつかの机を付け、話しやすいようにする。
- ・時程表や時間割などを掲示する。

○学級担任との関わり

校内別室を利用する時間に合わせて、学級担任が校内別室を訪問し、面談を行うようにした。その際に学級の様子を伝え、その後の学級の生徒との交流活動につなげやすいように配慮している。担任との面談をしてから交流する流れが定着している。

成果

週4日、校内別室に登校することができている。学級の生徒との関わりを通して、以前に比べて自分の意見を相手に伝えることができるようになっていく。

課題

学級復帰に向けて、今後の対応方針を立て、より充実した不登校対応とする。

校内別室指導支援員配置校について

不登校児童の状況

対象児童は、人の多さによる様々な刺激、一斉指導のペースに合わせる事が難しい等の理由で教室に行くことに困難を感じていた。真面目な児童であるため、教室で授業を受けたいと思っているが、刺激が多く自分とペースが合わない教室に行く心のエネルギーがない。登校後、別室で自習をしたり、校内別室指導支援員と会話をしたりすることで、心のエネルギーを回復して、教室に向かっている。

具体的な取組

○別室での支援の効果

当該児童は、3年生で不登校になり、4年生になり、別室利用を始めると、校内別室指導支援員と自習をしたり、楽しく会話したりして過ごすことができ、学校での表情が明るくなった。別室での様子を保護者と共有したことで、個別での指導が当該児童にとって必要だと保護者が判断し、学びの多様化学校へ転校した。

○外部機関との連携

登校児童への対応として、SC、SSW、子ども家庭支援センター、児童相談所、医療機関等などとの積極的な連携を進めている。その中で、校内別室指導支援員は、児童の居場所づくり、相談相手として機能している。

○児童のペースを尊重した別室登校

4年生の夏休み明けから欠席が続いていた児童だが、給食の時間だけ登校し、早めに来たときは別室で校内別室指導支援員と過ごし、学校で安心して過ごせる場所を確保することができた。今後は、別室での時間を長く取れるように進めていきたい。

○支援員の学級での役割

校内別室指導支援員は、別室対応の児童がいない場合は、必要に応じて各学級に入って支援を行っている。不安が高まるとすぐに泣いてしまう児童に対し、校内別室指導支援員が寄り添いながら、学習や身の回りのことを支援している。支援が入ると児童は安心した顔をして課題に取り組むことができる。



成果

居場所の選択肢が増えたことで、児童が不登校になることを未然に防げている。校内別室指導支援員がいることで、教員の負担が軽減されている。担任以外に頼れる職員が増えたことで、児童が安心して学校生活を過ごせている。

課題

校内別室指導支援員の資質・能力の向上が課題である。

不登校生徒の状況

具体的な取組

支援員は、当該生徒の要望に応じて授業や給食などで付き添いをし、一緒に教室へ行っている。

【環境整備】写真のとおり



入室前に保護者の願いや生徒の目標、ルールについて確認を行い、面談シートで情報共有している。

[illegible]

- ・支援員が作成した報告書の確認

校内別室指導支援員の配置により、組織的な不登校対応を充実することができた。

生徒の個のニーズに応じた適切な支援を行えるよう、個々の様態に応じて対応できる校内体制を構築する。

「つながるプラン」 ～学校での登校支援～

不登校児童の状況

対象児童は、学習の不安から精神面の不安につながり、令和5年度から不登校となった。現在は、令和6年度より設置した校内別室を活用している。

具体的な取組

○デジタル機器を使用した支援

一人1台端末を利用して、不登校児童における学習の機会を確保した。方法としては、教室で行っている授業を配信し、その内容を別室で見ながら授業を受けている。

このことにより、教室に入りにくい児童も参加することができた。

○校内別室の状況

【構成】 学校コーディネーター・民生児童委員・元教員・図書館ボランティア
計6人

【設置】 目的に応じた2つの校内別室を設置

【環境整備】

写真のとおり



○校内別室の手引き

保護者・子供と面談の際に活用している。

入室前に保護者の願いや子供の目標、ルールについて確認を行い、面談シートで情報共有している。

面談シート	
項目	内容
保護者の願い	
子供の目標	
ルール	
その他	

○わくわく清掃の実施による居場所づくり

「わくわく清掃」という全校による清掃活動を実施した。内容は、校内を80か所に分担して、縦割り班により清掃活動を実施した。

この活動を通して、達成感を味わう児童が多くおり、日々の学校生活の充実につながっている。

成果

当該児童は、令和5年度までは、精神的な不安が重なり教室へ登校することができなかった。しかし、校内別室が設置されたことにより学校へ登校できるようになった。

校内別室指導支援員と学級担任が連携して、当該児童にアプローチをすることができた。

課題

1～6年生の児童の個のニーズに応じた適切な支援を行えるよう、個々の様態に応じて対応できる校内体制を構築する。

校内別室について

不登校児童の状況

様々な要因による不登校または登校渋りの児童が校内別室指導支援教室を活用している。令和6年度当初に登校渋りの傾向が見られた児童は数人いたが、校内別室支援教室を活用することで、登校することができている。令和6年度の新規不登校の出現率は0%である。

具体的な取組

○状況に応じた2教室の活用

工作道具、トランプ、文房具等を常備し、リラックスした雰囲気ですぐに遊んだり学んだりしている。

静かに本を読んだり、学習したりして過ごしたい児童のために、できるだけ刺激を少なくしている。



○連絡票の活用

担任が児童と相談し、利用時間と課題を決め、連絡票に記入する。利用する児童は指導員に連絡票を渡し、利用を始める。

担任と児童が相談して時間や課題を決めることで、児童が納得して有意義な時間を過ごすことができる。

○児童の安全確認

児童の安全確認及び、自分の判断で利用することがないようにするため、児童が校内別室に入室した際、校内別室指導支援員が副校長と担任に児童の入室と利用時間の確認を行っている。

○定期的な支援ミーティングの開催

利用児童一人一人の登校状況に応じた個別の対応について、管理職、登校支援コーディネーター、校内別室指導支援員が定期的にミーティングを実施し、現在の状況を確認し、取組の改善について共通理解を図っている。



成果

不登校出現率は、5.5%から2.7%に減少した。校内別室が不登校や登校渋りの児童にとって、安心して過ごせる場所として機能している。

課題

安心できる空間にはなったが、使用ルールの徹底や、学級での学習機会の増加が課題である。

校内別室指導支援員配置事業について



不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校第4年生から不登校となった。中学校に入学してからも不登校が続き、保護者の希望で名簿にも氏名を載せていなかった。1年生の3学期に別室を利用し始め、2年生に進級するときには、本人・保護者ともに在籍数に含めることを了承した。現在は、週に1日2時間程度別室に通っている。

具体的な取組

○組織力の向上、校内体制の強化

校内委員会の中で、週に1回情報共有を行っている。メンバーは副校長、生活指導主任、特別支援教育コーディネーター、登校支援コーディネーター、各学年担当、養護教諭、特別支援教室専門員、SC、校内別室指導支援員である。対象生徒の週ごとの様子について情報共有を図り、翌週以降の方針を決めている。

○実践の成果についての共有

校内別室指導支援員には、毎回記録を作成してもらい、別室にてどのような支援を行っているかが分かるようにした。また、この記録は、ファイルにまとめてあり、それぞれの学級担任や他の教職員も見られるようにして、情報共有を図っている。

○個々の不登校生徒への支援1

学習意欲があり、「算数（数学）を勉強したい」と言う当該生徒に、本人の学力に合った教材やプリントを用意し、学習支援を行った。「漢字も勉強したい」というつぶやきから、漢字定着のためのドリル学習も行った。

○個々の不登校生徒への支援2

当該生徒と同じく、別室に来ている生徒たちがゲームをしているときには、声を掛け、自然とコミュニケーションの場に入っていけるようにした。「今は学習をしたい」と言えば無理に誘わず、当該生徒の意思を尊重しながらコミュニケーションの場への声かけを行った。

成果

中学校1年生の3学期から月に一度別室のある日に登校し、学習することができた。以前は「自分の存在を他者に知られたくない」という意識がとても強かったが、取組を通して保護者とともに本人の意識が大きく変わった。

課題

登校できる日を週1日から2、3日へと増やし、様々な人と円滑なコミュニケーションが図れるようにする。

校内別室指導支援員を活用した不登校対応の充実について

不登校児童の状況

対象児童は、第3学年から人間関係を理由に欠席が目立つようになった。3年生では2学期から約40日間欠席し、登校した日も一日30分程度校内にいる状態となった。4年生では、校内別室指導支援員に配置により、ケース会議を定期的を実施するとともに、SCや関係諸機関との連携を図り、当該児童の支援の充実に取り組んできたってきた。

具体的な取組

○校内体制の充実

月1回開催している校内委員会において、不登校児童の情報を共有する時間を設定している。

登校時の状況や今後の具体的な支援策について協議・確認を行い、組織的な対応に取り組んでいる。



○環境の整備

教室に入れない児童の居場所として、校内に不登校児童を対象とした別室を確保している。担任から指示のあった課題の自習が中心となっている。



○関係機関との連携

SC、SSWをはじめ関係機関との連携を図り、児童や保護者の思いに寄り添い、不登校児童にとって最善の取組を模索している。

○居場所の提供

校内別室には、当該児童に関わりがある担任や校内別室指導支援員だけでなく、専科の教員やクラブの教員等が可能な限り参加して、居場所として落ち着いた場所になっている。

成果

1学期は別室指導を行い、週数日の欠席が続いていたが、2学期に入り、欠席は2、3週間に1日程度と減少し、別室から教室へ向かうようになっている。担任から与えられた課題に取り組むだけでなく、給食の喫食やクラブへの参加意欲の高まりなどで在校時間が増え、自信をつけている。

課題

利用する児童が増加した場合や、別室にも入れない児童への支援方法・体制を確立するとともに、校内別室指導支援員の専門性を高めていく。

不登校生徒への対応について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学生当時から不登校の状態が続いており、中学校入学後も入学式を終えると不登校の状態になった。性格は明るく、コミュニケーションを取ることもできるが、ゲームなどで深夜まで起きていることも多く生活習慣が乱れており、通常登校が難しい。また、学習習慣も身に付いていない状態である。

具体的な取組

○家庭訪問・三者面談への参加

校内別室指導支援員は、担任や不登校対応巡回教員と連携を図り、当該生徒が別室に顔を出した際、その週の様子などを聞くなどの対応を行っている。また、三者面談にも同席し、担任の立ち会いのもと、今後の対応について話を進めている。

○教育支援センター等との連携

市の無料塾に通っている。その職員と連絡を取り、月1日生徒を連れて学校に来てくれている。そこで、塾への参加状況などを共有し、生徒からも話を聞いている。

○校内別室指導支援員との給食の喫食

S Cと面談をするために登校している。面談の後、校内別室指導支援員と一緒に給食を食べることができ、そのあとの別室での学習へとスムーズにつなぐことができた。

○別室対応による不登校生徒の支援

S C面談で登校し、給食を食べた後、校内別室で1時間ほど学習をしている。



成果

令和6年度11月現在の不登校出現率は、前年度の10.88%を下回って、6.44%となっている。

課題

登校をするようになった生徒が「継続的に」登校するようになるまでには時間がかかるため丁寧な指導を続けていく。

不登校生徒支援に関する校内別室支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校時代から学力不振や怠学による学習意欲の低下が原因で不登校であった。中学校入学後も教室では学習できず、週 1 日の別室支援を始めた。個別支援により、学習意欲を高めること、相手の気持ちや状況を理解し、自分の気持ちや考えを言葉で伝えることができるようになることが目標である。

具体的な取組

○生活アンケートの実施

毎月 1 度、生活アンケートを実施している。その結果から生徒の悩みやつまづきに早期に気付き、S C や校内別室指導支援員と対応策の検討をしながら、学校生活を充実して意欲的に送れるように指導を促す。

○校内別室指導支援員による不登校生徒への支援

毎週金曜日に個別支援の時間とグループワークの時間を取り、不登校生徒が登校した際にはカードゲームで関わり、生活の振り返り指導を行う。さらに、状況に応じた適切な言動について考えさせられるようにする。

○マンツーマンの学習支援

校内別室指導支援員がマンツーマンで不登校生徒の学習支援を行い、基礎学力の定着を図る。



○校内別室の活用

別室を利用し、定期テストを受けたり読書をしたりして過ごす。

仲の良い友達を休み時間に別室で話し、コミュニケーションを図る。

成果

集団で過ごすことが難しい生徒が、別室登校を通して安心して登校でき、落ち着いて個別学習に取り組んでいる。学習意欲につながることができている。また、支援員とのコミュニケーションを取ることで社会性を育むこともできている。

課題

別室に登校すること自体も難しい生徒の支援や学習意欲が全く感じられない生徒の支援が課題である。

校内別室指導支援員による登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校のときの人間関係のトラブルにより不登校となり、中学校でも不登校の状態が続いていた。外出することはほとんどなく、担任やＳＳＷが月１回程度、家庭訪問を実施している。

具体的な取組

○校内別室指導支援員と連携した校内体制
当該生徒は、将来のために、自宅で英語の勉強を続けてきた。ずっと同じ環境で学習を続けるのは難しいということから、別室で英語のプリントを取り組むなどの活動をしている。また、校内別室指導員だけではなく、不登校対応巡回教員とも連携を図りながら、対応を行っている。

○関係の教職員との打ち合わせ

朝、校内別室指導支援員との打合せを担当教員、担任、当該生徒の学年教員が行い、対応の仕方(学習内容・課題)について確認している。



○校内での居場所づくり

当該生徒は、午前中に登校し、学習を終えた後、別室にて、校内別室指導支援員と一緒に給食を食べるようにしている。ゲームなどのバーチャルの世界でしか人と関わることがなかったため、なるべく学習以外でも人と関われる機会をつくれるようにしている。

○別室の様子

本来はパソコン室だった場所を、パーティションで分けて、別室をつくり、落ち着いて課題等に取り組めるような環境を整えている。



成果

昨年度学校に登校することができていなかった生徒が、別室を利用することを目標として、定期的に登校できるようになった。

課題

不登校生徒のうち、関係機関と連携がとれていない生徒に対して、別室登校やＩＣＴ機器を用いた関わりなど、支援の方法を模索していく必要がある。

不登校生徒対応の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、生活リズムの乱れ、学習面の遅れなどの複数の要因から小学校の頃から不登校傾向であった。中学校入学後も、1学期は休みがちで、多くて週1日の登校である。当該生徒への取組を継続して実施したことで、ほとんど休まずに登校できるようになった。

具体的な取組

○こまめな二者面談、三者面談の実施

毎週火曜日に担任と生徒の二者面談を設定している。また、欠席傾向のある生徒については、保護者との二者面談や保護者・生徒との三者面談を行うことで、登校状況の改善につながるようにしている。

○校内別室指導支援員の取組

校内別室指導支援員が常駐しているため、時間を気にすることなく、いつでも懇談や相談ができる。

訪問記録を活用することで、生徒情報を共有し、生徒の状況に応じた対応ができる。

安心できる場所の確保ができています。生徒に寄り添い、生徒のペースを大事にすることで、生徒が安心できる場所を確保することができる。

○個別学習の実施

週1回、希望者を対象に、授業を抜けて、小学校の算数と漢字の復習をする時間を設定している。小学校の学習が積み上がっていない生徒が、スモールステップで自信をつけられるようにしている。簡単な問題やプリントを用意し、復習から始めた。



○計画帳の利用

生徒が次の日の時間割や持ち物、課題を記入する連絡帳として計画帳を活用している。担任と生徒とのコミュニケーションツールとしての役割もあり、担任と文章でやりとりができるため、直接話すのが苦手な生徒でもコミュニケーションが取りやすくなる。

成果

登校頻度が上がったことで、クラスメイトとの交友関係が深まり、学級が当該生徒の中で安心できる場になっている。登校できるようになってからも教員との面談を継続的に行い、当該生徒の変化にすぐに気付いて対応できる体制を整えている。

課題

学習面の遅れがあるため、個別学習や放課後の補習教室などで個別最適な学びを実践していく。

校内別室の取組について

不登校児童の状況

対象児童は学習と集団行動への苦手意識から不登校になり、月 1 日程度しか登校できていない。学校に来て教室には入れない状況が続いている。家庭の養育能力に課題があり、家庭と連携を図ることが難しい。

具体的な取組

○児童が選択できる学習

学習の遅れを少しでも取り戻すため、準備してある学習のプリントに取り組むようにしている。別室にいる時間は、自分で取り組んでみたい学習、好きな活動がどちらもできるようにしている。



○特別支援教室との連携

コミュニケーション能力に課題があるため、特別支援教室と連携し、コミュニケーション能力向上のためのゲームを行い、振り返りを通して、自分の行動の見直しを行っている。



○デジタル機器を活用した不登校生徒の支援①

【ドリル型学習コンテンツ】

学習者用端末を持ち帰り、好きな時に学習できるようにしている。また、担任は学習している範囲などを把握して支援に生かしている。



○デジタル機器を活用した不登校生徒の支援②

【クラウドでの共有】

その日授業で学習した内容や宿題、運動会の表現運動の動画などを送ることができるので、毎日学校の様子を伝えることができる。



成果

現在、登校ができていない児童数は 2 人であり、フリースクールと連携を図るとともに、一人 1 台端末を活用してつながることにより、どこともつながっていない児童は“0”になった。

課題

不登校の未然防止のために、校内別室を通じて、さらに「相談できる教職員」と「安心できる場所」をつくっていく。

校内別室指導支援教室を生かした登校支援について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校3年生の9月までは通常どおり登校していたが、10月の運動会後から欠席が増えた。保護者は、登校時に付き添うなど協力的である。

具体的な取組

○やりたいことができる環境づくり

音楽の授業には出られなくても、その時間に音楽に慣れ親しむことができるよう、オルガンを設置し、演奏することができる。

同じ部屋の中でもそれぞれの児童が個別に活動ができるよう、パーティションによってスペースを分けている。



○安心して利用できる飾りつけの工夫

校内別室指導支援員によって季節感のある飾りが部屋の壁面に飾られている。

マスコットキャラの特大ぬいぐるみも配置し、気持ちが不安定なときは、寄り添ったり抱きしめたりすることで、落ち着かせることができる。

○昇降口を通らずに入れる出入口の配置

校舎の1階の突き当たりと、外との出入り口のそばに別室を配置することで、友達の目を気にすることなく、校内別室を利用することができる。

○きめ細やかな情報共有

別室での様子や過ごし方、気付いたことなどの情報を、連絡帳に記載し回覧することで、担任だけでなく、養護教諭、登校支援コーディネーター、管理職に迅速かつ確実に共有している。

成果

令和5年度10月以降で60日以上欠席があったが、別室を利用してからは、欠席が減った。給食を自分の教室まで取りに行ったり、担任から出された課題に少しずつ取り組んだりすることができた。

課題

校内別室指導支援教室について、保護者や児童に理解してもらうことで、より安心して利用できるようにしていく必要がある。

教室以外の居場所をつくる 校内別室指導支援員と地域の力を生かして

不登校児童の状況

真面目で学習態度のよい対象児童は、低学年の頃から登校に困難を抱え、集団の中では、どうふるまってよいのか迷う姿が見られた。4年生に進級後、欠席が顕著に増え、この年は年間 33 日の欠席となった。登校できても母子分離が難しかったり、校長室などで個別指導を受けたりすることが多かった。

校内別室ができ、別室利用を中心に、少しずつ学級での授業に参加できるようになり、併せて表情も豊かになってきた。令和 6 年度の欠席は 11 日である。別室利用の児童とは打ち解け、農園作業も楽しみにしている。

具体的な取組

○別室の児童同士の人間関係づくり

校内別室指導支援員が当該児童のペースを大切にしながら、別室を利用している他の児童との橋渡し役をつとめている。このことが、同じ教室に通う友達との交流のきっかけとなった。



○利用申請書の導入

別室での生活が自由で楽しくなりすぎてしまい、学習するために利用したい児童が入りにくくなった。校内委員会で検討し、児童・保護者の想いや目標を考えてもらい、利用申請書の提出を条件に利用することとした。結果、保護者の思いも知ることができ、具体的な支援の見通しがもてるようになった。

○児童の情報共有

校内別室指導支援員と教員をつなぐ日誌を活用している。校内別室指導支援員が、朝、保健室まで取りに来て情報交換を行う。放課後になると、再び保健室まで戻し、登校支援コーディネーターが内容を確認し、教員間で共有して、最終的には管理職が確認を行う。

○他者との協力した活動

これは校内にある畑を活用し、野菜作りに励んでいる様子である。

手探りで始めた活動であるが、学校運営協議会で紹介したところ、手伝ってくださることになった。

現在では、別室の利用者が協力しながら活動できる環境が整っている。



成果

校内別室指導支援員の配置により、児童にとって教室以外の居場所を確保できた。登校に困難を抱えた多くの児童が、安心して登校できる場所を作り出すことができた。この別室利用を中心として、在籍学級に通えるようになった児童も多い。保護者同士が関わり合う場ともなった。この教室での見守りや農園作業の補助などに、地域から多くのボランティアの方々に参加していただくこともできた。

課題

不登校状況の児童は減ったものの高止まりしているため、別室での活動の工夫をするとともに、保護者との連携も深める必要がある。

校内別室について

不登校生徒の状況

対象生徒は、真面目で感受性が高い。第1学年の時に本人の新型コロナウイルス感染による長期欠席により、学習面と人間関係に不安を覚え欠席が続いた。母親が学校に対して、非常に協力的であり、PTAなどの仕事も担ってくれている。

具体的な取組

○個別学習時間の設定

学校生活時程を軸とした校内別室の生活時程表を作成し、「学習時間」、「ドリル学習」、「リカバリータイム」、「探究活動」とそれぞれ20分の時間枠を設けて、それぞれの生徒が自分自身で教室内での過ごし方を決めた。

○教室復帰への支援

生徒は給食時、校内別室指導支援員とともに在籍クラスへ給食を取りに行くようにした。朝学活や終学活、学年行事に向けての活動時間等に本人の意思で参加希望がある場合は支援員と一緒に教室等へ入る等のサポートを行った。

○小集団による活動時間の設定

校内別室の時間割内に「リカバリータイム」、「探究活動」の時間を設定し、利用している生徒同士と支援員で交流を図る活動を行った。

○登校支援委員会の開催

管理職、登校支援コーディネーター、生活指導主任、各学年担当、養護教諭、SSW、校内支援員のメンバーで月1回開催している。

登校支援委員会で作成した「教室復帰に向けたアプローチカード」を活用して、校内別室を活用している生徒一人一人の利用状況と、教室復帰に向けての現状をアセスメントしている。教室復帰までのイメージを4段階作成し、生徒それぞれに見合った状況の声かけを職員全体でできるように情報交換を行っている。



成果

当該生徒は、第2学年の2学期までは、全く登校することはできなかった。校内別室支援開始後の第3学年の4月からは、決まった時間に、毎日、別室登校できるようになった。現在は、教室復帰へ向けて毎日朝学活時教室へ入ることができるようになってきている。

課題

現在、11名の生徒が校内別室を利用している。「教室復帰」を目標に支援員と教員が情報交換を行いながら、それぞれの生徒のニーズに持続可能な形でこの教室を活用していくための事業継続のための予算確保が課題である。

校内別室指導支援員の支援取組

不登校児童の状況

令和6年度より、本校は校内別室指導支援員を配置した。教室への登校に不安がある、少し気分を落ち着かせてから教室へ行きたいなど、登校に不安がある児童に対して支援を行っている。不登校や登校渋りの要因は様々であり、一人一人に応じた対応を心がけ、教室復帰の支援に取り組んでいる。

具体的な取組

○別室の設置場所の工夫

普通教室から少し離れた静かな教室を利用することで、児童が安心できる環境を確保した。



○支援員のローテーションの工夫

校内別室指導支援員のローテーション勤務により校内別室の開室時間は、登校時刻から給食、下校までの全時間帯で開室できている。

別室指導の約束（児童用）

- ・登校したら、今日の予定を自分で決めよう。
- ・授業の時間は、決めた予定に取り組もう。
- ・休み時間は自由に過ごそう。

○一人一人の学習の場や時間を確保

パーティションなどで区切り、児童が自分のペースで利用できるよう、環境を工夫した。



○支援シートの活用

登校支援シート		児童番号(記入)	氏名	学年	性別
氏名		学年		性別	
1. サンサンルーム敷設に賛同すること					
本人の同意					
保護者の同意					
2. 現在の様子(サンサンルーム敷設に賛同したきっかけ等)					
3. サンサンルーム敷設での目標(チェック欄にチェックを入れる)					
☐ 学習に集中する。 ☐ 友達と交流する。 ☐ その他					
☐ サンサンルームで学習する。 ☐ サンサンルームで友達と交流する。 ☐ サンサンルームで学習する。					
4. サンサンルームの利用状況					
氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名

独自の支援シートを活用し、児童一人一人に合った登校の目標、支援の方策等について保護者と連携し一諸に考えている。

成果

不登校や登校しぶりの児童にとって、安心して過ごせる場所を確保することができた。保健室登校の児童が校内別室へと居場所を移し、養護教諭は、通常の保健室業務に専念できた。その結果、不登校出現率が大きく減少した。

課題

校内別室指導支援員と担任との連携、情報共有の徹底、校内別室指導支援員の人材確保、校内別室での過ごし方、学習内容、教室への戻し方などが課題である。

本人に寄り添い、不安を一緒に解消する

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校入学時から、不安感が強く教室に入りづらくなり、次第に欠席が目立つようになった。保護者は当該生徒に寄り添い、本人が学校で安心した生活を送ることができる様にしたいという願いがあった。校内で協議し、校内別室指導を行うことにした。

具体的な取組

○オンラインでの授業参加

学習の遅れへの不安を解消するため、一人1台の学習者用端末を活用し、校内別室と教室をオンラインでつなぎ授業に参加できるよう環境を整えた。校内別室指導支援員は、学習者用端末の操作の補助、オンライン環境の整備を教員と協力して行った。

○個に応じた教科指導

教員免許を取得している校内別室指導支援員が、個別指導を行い、当該生徒へ得意なことや興味をもっている内容を中心に指導することで学習の遅れに対する不安を解消し、教室へ復帰しやすい環境を整えた。

○不安の解消

週1回、SCがカウンセリングを実施し、助言や援助を行った。カウンセラーが不在の時は、校内別室指導支援員が丁寧に話を聞き、教員と連絡・調整を行い、生徒が安心して登校できるようにした。

○行事への参加支援

体育大会では、生徒席に入ることへの不安を感じたため、校内別室指導支援員が付き添い、保護者席で観戦をした。また、地域の方と自然に触れ合う活動として、学校運営協議会の協力で農園活動を実施した。校内別室指導支援員は農場まで付き添い、一緒に収穫作業を行った。



成果

別室指導開始当初から、ほぼ毎日登校できるようになった。また、滞在時間も増え、令和6年度2学期からは、始業から終業まで滞在することができるようになった。週2時間程度は、教室での授業に参加できるようになった。

課題

別室指導についての運営・支援体制の維持をすること。

不登校に対応における別室利用について

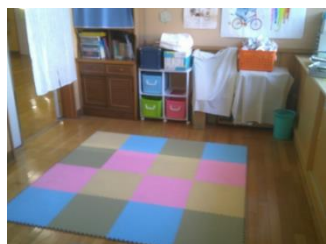
不登校児童の状況

対象児童は、令和5年度後半から生活が乱れ無気力になり、不登校になる。令和6年度から、別室登校を始め、少しずつ登校できるようになった。現在では、毎日登校し、一日1時間別室で過ごした後、教室で過ごすことができている。

具体的な取組

○別室内の雰囲気づくり

マットを利用し、リラックスして友達と話ができる心を落ち着ける場所を作っている。



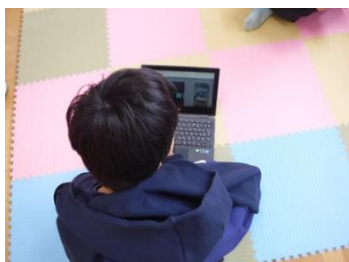
○児童の思いに応える道具や書籍の充実

校内別室指導支援員や友達と話をしながら、活動できるものや一人で過ごすための本を用意している。



○一人一台端末を活用した学習

学習に向かえない時には、学習者用端末を使用し、学習に取り組むように促している。



○利用児童同士の関わりを促す工夫

別室で過ごす際にも、児童同士の関わりが生まれるように、教え合い活動などを促している。



成果

登校することへのハードルを下げることで、登校できることで、担任と直接話しをすることができるようになった。ほとんど登校できなかった児童2人が、別室を利用することで毎日登校できている。

課題

別室を利用する児童が、別室のルールに基づいて使用し、教室復帰につなげることを。

校内別室指導教室を生かした登校支援について

不登校児童の状況

主な対象児童は、高学年の児童である。SCやSSWと連携して、アセスメントに基づいて環境調整を行っている。現在、保健室の横のスペースと別室を併用しながら児童が登校した際に、学習する場を用意し、居場所づくりと学習の機会を提供できるようにしている。

具体的な取組

○別室スペースの有効活用

別室スペースを2部屋用意した。1つは保健室をパーティションで区切り、もう1つは、教材室を整備して別室に整えた。校内別室指導支援員の確保が難しい状況であることから、保健室の一部をパーティションで区切ることで、いつでも居場所を確保することができるようになった。

校内別室指導支援員が勤務できる場合は、別室を有効に活用して、学習支援を行っている。別室で過ごししながら、教室で学習できる授業には参加し、少しずつ教室で過ごすことができるようになってきている。



○子ども支援会議

児童の実態を適切にアセスメントし、対応を子ども支援会議で組織的に決定している。SSWとも連携し、適切な就学や別室登校につなげることができた。



○運営ルールの明確化

運営マニュアルを作成し、利用できる対象者について明確にした。対象者を明確にすることで、別室教室にて児童同士でふざける場面がなくなり、落ち着いた教室環境を構築できた。

○校内別室指導支援員の役割

別室での過ごし方は児童により異なっている。別室指導支援員は、学習のサポートや室内遊び、懇談など児童一人一人の状況に応じた支援を実施している。

成果

様々な理由により、教室で過ごすことができない児童にとって、別室は学校での居場所となり、自分のペースで学習することができた。自分の居場所がある安心感から少しずつ教室で過ごす時間も増え、登校につなげることができた。

課題

校内別室指導支援員の確保が大きな問題となっている。別室をより有効に活用するために人材の確保が求められている。

家庭から学校(別室)へ、別室から次のステップへ～一歩踏み出そうと思える教室～

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校在学時から登校することが難しかった。中学校に入学してからは、教室で生活・学習することができる日もあったが、人間関係や学習について課題が積み重なるなど、様々な理由から登校できなくなった。しかし、令和6年度から本格的に別室支援が始まったことで、週に3日以上登校できるようになった。

具体的な取組

○別室登校の案内リーフレット

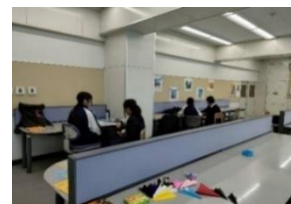
しばらく登校ができていない生徒を中心に、担任もしくは学年の教員がリーフレットを手渡すことで、利用を促している。内容は、「別室で何ができるか」、「いつ開いているのか」などが記されている。利用の仕方や考えも生徒によって違うことを意識できるようにしている。

○校内別室指導支援員との連携

不登校生徒の担任と校内別室指導支援員が、朝の時間に打合せを行い、利用状況や今後の取組等を検討している。学習関係の質問なども、この時間に共有することで、具体的な手だてを講じることに繋がっている。

○第1教室と第2教室を用意

主に広さのある第1教室を使用し、1日に4、5人が利用している。自習、読書など静かな活動の他、校内別室指導支援員との会話やボードゲームでコミュニケーションを楽しむ活動もある。ざわざわしている空間などが苦手な生徒もいるため、狭い空間の第2教室を使い、臨機応変に部屋を使い分けている。



○支援員の強みを活かす

校内別室指導支援員の経歴は様々であり、工作が得意な方も多く、コミュニケーションを楽しみながら、季節を感じる折り紙アートなどに取り組んでいる。

成果

今まで登校できなかった生徒がほぼ毎日、もしくは週に数日登校できるようになった。また、別室の中で生徒同士、生徒と校内別室指導支援員でコミュニケーションをとることで、生徒の苦手なことや思っていることをより多く知ることができた。

課題

楽しく過ごすだけの生徒もいるため、校内別室指導支援員や教員は運営方法や方針を見直し、計画・実施に苦慮している。

校内別室指導支援員の支援について

不登校児童の状況

小学校1年生のときから、こだわりが強く、自分の思いどおりにならないと、友達を責めたり、自分自身を責めたりする言動が続いている。トラブルが起きた時には登校できない状態が続くことがある。校内別室の利用を促したところ、自分の自由に過ごせる時間が多くあるため、ほぼ毎日登校できるようになった。

具体的な取組

○好きなことができる時間の設定

自分の好きなことができる時間を設け、登校を促す。個別に好きなことをする時間、少人数で運動したりゲームをしたりする時間があり、児童は主体的に校内別室での過ごし方を考え、自分の得意なことが十分できることから自己肯定感も上がり、登校日数が増えた。

○時間意識と学習時間の設定

1日の過ごし方を自分で立てるようにして、チャイムの合図で行動できるようにした。また、1日の中で学習をする時間を設定し、短時間でも取り組めるようにした。学年の学習でなく自分でできる学習を選択できるようにして、学習への動機付けを行っている。

○ICTの活用

学級に戻れない場合でも授業に参加できるように、学習者用端末を使用し、オンラインによる授業参加を行った。また、ICT支援の個別指導で、プログラミングを体験するなど、個別の学習を促した。



○環境の整備

教室と同じ広さの教室を校内別室として使用している。登校意欲を刺激するため、運動用具、アイロンビーズやボードゲームなど、特別支援教室のものを借用して活用した。



成果

当該児童の登校日数が昨年度に比べると顕著に上昇した。また、利用している児童の自己肯定感が向上した。

課題

校内別室の居心地が良すぎて、教室復帰に至っていないことと、学力の定着が課題である。

不登校生徒に関する校内別室支援の様子について

不登校生徒の状況

対象生徒は、昨年度まで在籍した小学校において、学力不振による学習意欲の著しい低下が原因で、5年生の3学期から不登校状態となり、6年生では4日しか登校できなかった。中学校入学後も3日目から欠席。担任より、校内別室指導支援室への登校を促した結果、4月中旬より、週2～3日来られるようになった。

具体的な取組

○別室が居場所となる取組

各学期で「生徒アンケート」を実施した。校内別室指導支援員は、別室生徒のアンケートを中心に内容を把握して、担任の先生と情報共有を行い、利用する生徒への温かな助言を行っている。

○別室対応による不登校生徒への支援

毎週月曜日の担当日に、校内別室指導支援員が校内別室指導支援室内の環境整備を行うとともに、生徒が登校した際には、カードゲームや工作などの活動を通して、積極的にコミュニケーションを図っている。

○担任とのコミュニケーション

校内別室指導支援員が調整を行い、担任の先生や学校の先生が定期的に校内別室に来て、当該生徒に声かけやコミュニケーションを積極的に図るようにしている。



○校内別室の活用

学習に対する意欲が見られないため、別室支援員による声かけを通したコミュニケーション活動により、学習意欲を促している。取り組みたい内容は、当該生徒は自らが考えるようにし、その希望に沿って、校内別室指導支援員とともに実施している。

成果

昨年度不登校だった生徒5人が、週に2、3日登校して学習や活動に取り組めた。

校内別室指導支援員との関わりを通して、不登校生徒の社会性を育むことができた。

課題

不登校生徒だけでなく、授業についていけない生徒も別室を利用するようになったため、学習意欲を高めるための手だてを講じること。

不登校児童への不登校解消に向けての取組について

不登校児童の状況

対象児童は、令和5年度から不登校である。令和6年度から配置された校内別室指導支援員や、令和5年度から関わっているＳＣ等の協力を得て、教室復帰を目指した支援を行った。

具体的な取組

○ＳＣとの連携

令和5年度から定期的に、ＳＣが親子とカウンセリングを実施している。

ＳＣは、その情報を管理職、担任、養護教諭等に報告している。

また、特別支援校内委員会等でも報告し、情報を共有している。

○定期的な電話連絡や家庭訪問

担任は、定期的に電話連絡や家庭訪問を実施している。

- ①当該児童や保護者の状況把握
- ②クラスや学校の様子を報告
- ③当該児童や保護者の不安や悩みの傾聴
- ④今後の支援の在り方についての協議
- ⑤手紙や課題の受け渡し



○別室指導

校内別室指導支援員による学習の支援では、できることを褒めて伸ばすような声かけを心がけた。

当該学年の教科書を中心に、休んでいた期間の学習にも取り組んだ。算数等は、既に学習した学年の内容に戻って指導を行った。

○クラスとの交流

クラス児童との交流では、担任が当該児童の意向を積極的に取り入れた。

休み時間や給食の時間に、クラス児童と交流することで、友達と自由に過ごすことができ、クラスへの帰属意識も高まった。

成果

不登校であったが、校内別室指導支援員やＳＣ等の協力を得て、教室復帰できた。

担任だけではなく、様々な立場から、当該児童や保護者に寄り添う支援をすることができた。

課題

学校内外のどこにもつながっていない、相談を受けていない児童がいるため、更なる対策や体制を整えることが課題である。

校内別室で育む自分の居場所感覚について

不登校児童の状況

入学当初は、対象児童が環境の変化を起因として不登校になったと保護者が捉えていた。しかし、2年生に進級しても続いていることから、当該児童の特性にも一因があると保護者が気づき始め、学校と連携して当該児童に合った登校方法や学習環境を模索している。

具体的な取組

○ドキドキしない場所を見つけよう 1
保健室の一部をパーティションで区切り、養護教諭との面談等で使用している。



○ドキドキしない場所を見つけよう 2
教室とは違う校内別室を利用して支援員と一対一で学習している。



○ドキドキしない場所を見つけよう 3
少しでも教室にいられたという自信をつけるために放課後の教室で支援員や担任と学習している。



○展覧会に作品作りで参加しよう
作品を出品することで学校の行事に参加できたという自信をつけるために、別室での作品作りに取り組んだ。



成果

フリースクールの利用も含めて、3割程度であった出席率が、9月末には7割程度まで向上している。

所属学級の担任の先生との関係性が構築でき、返事やうなずきだけだったコミュニケーションも、会話ができるようになった。

課題

きめ細やかな支援のための情報共有を強化し、当該児童の特性に応じた支援のを検討していくこと。

学習の遅れを原因とする不登校生徒の対応について～自己肯定感を高める取組を通して～



不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校第4学年時から、教室に入ることができない状態が始まった。その後、不登校となり、別室などを使用することもあったが、得意なことや好きなことに関わる学校行事には参加することができていた。中学校入学時には、保護者も不登校が続くと予想し、給食の手続きをしない状況にあった。

具体的な取組

○校内支援体制の強化

管理職、生活指導主任、登校支援コーディネーター、不登校対応巡回教員、学年主任、養護教諭、別室支援員が集まって各学年の不登校児童生徒についての情報共有を行っている。月1回は、SSWも入り、当該生徒の情報を伝えている。

○ステップアップへの助言

小学校の時には、得意なダンスや絵、裁縫などで授業に入り、一緒に活動することができていたという状況を踏まえ、興味のありそうな教科や単元の時には声をかけて、教室で授業を受けるなどの取組を行い、美術の作品制作や、家庭科の裁縫などを行うことができた。

○不登校対応巡回教員

管理職やコーディネーターの先生と不登校生徒に関する情報の共有や支援の検討、連絡会や研修で得た情報の共有を行う。

不登校生徒の保護者と面談を行い、校内別室を活用して登校支援を行う。

SSWと連携をして、一緒に不登校生徒の登校支援を行う。

○安心できる別室の環境

1階の外に面した場所に設置し、他の生徒から見られずに外からの入室も可能である。

学習支援や給食指導を行い、他の生徒と同様の学校生活を過ごせるようにした。一人で過ごすのは難しいが、その分、不登校対応巡回教員との会話が自然と生まれる。

成果

友達と登校し、朝の学活に参加し、昼には教室で昼食を食べ、帰りの学活にも教室に参加するなど、以前に比べ、格段に登校回数は増えた。また、友達ともうまく関われるようになってきた。さらには、当該生徒の継続した登校により、保護者の表情も明るくなってきた。

課題

楽しいことに興味をもち、学習に対する意欲が低くなっているときの支援方法が課題である。